

ウルトラシャルソン報告書

2014年10月1日
ご当地シャルソン協会
ウルトラシャルソン実行委員会



2014年8月24日～28日の5日間で、東北の震災被災地沿岸地方（釜石～大船渡～陸前高田～気仙沼）を合計約120km走り、その道中で地元の方々と交流しながらまちからまちへ移動。到着後、講宴会と称してそれぞれの地域で積極的に活動してきた方々に話を聞き、地元の美味しいものを味わってさらに体験を共有した。まだまだ苦勞する人が多い現状だが、ポジティブな要素を共有し発信することで、地元の方々を元気づけ、同時に被災地の現状を伝え続けるのがウルトラシャルソンである。

目次

1. はじめに
 - 1.1. シャルソンとは？
 - 1.2. ウルトラシャルソンとは？
2. 実施スケジュールと参加人数
3. 企画から実行まで
 - 3.1. シャルソンの誕生と急成長
 - 3.2. 被災地への思い
 - 3.3. ウルトラシャルソン
4. ルート
5. 報告会の開催
6. 参加者の声
 - 6.1. 山戸恵利加さん（京都）
 - 6.2. 上田拓明さん（京都）
 - 6.3. 加藤武留さん（岐阜）
 - 6.4. 田上百合子さん（東京）
7. 地元からの声
 - 7.1. 久保田崇さん（陸前高田市副市長）
 - 7.2. 石井重成さん（釜石市）
8. メディア掲載
 - 8.1. 東海新報
 - 8.2. 東北まぐ
 - 8.3. 広報かまいし
 - 8.4. 東京FM / JFN系列『クロノス』
9. 実施概要
10. おわりに

1. はじめに

1.1. シャルソンとは？

走ることを通じてまちを再発見し、人と人とがつながるランニングイベント。「ソーシャルマラソン」を短縮して作った造語で、人と人との触れ合いという意味でリアルにソーシャルであり、SNSを活用してまちの魅力をオンラインで拡散するという意味でバーチャルでもソーシャルである。

2012年2月に世界初のパクチー料理専門店「パクチーハウス東京」と東京初のコワーキングスペース「PAX Coworking」を運営する株式会社旅と平和が、同社の所在する世田谷区経堂を中心に世田谷区内を（再）発見するためのランニング・イベントとして「経堂マラソン」を開催したのがそもそもの端緒。そのときの参加者が「また参加したい」「ほかのまちでも実行したい」との気持ちを各所で発信。同年4月14日に日産自動車が展開する「思いやりライト運動」の一環として「よこはまシャルソン」が、同21日に「墨田シャルソン」が開かれた。この企画に先立つ形で、その後のシャルソン主催者の支援とネットワークづくりを目的として「ご当地シャルソン協会」（2012年4月1日）を設立した。

地域活性と楽しさを両立させるランニングイベントとして、日本全国の意欲的な個人・団体・企業が注目。2014年秋までの約2年半で全国で50回程度開催されている。

1.2. ウルトラシャルソンとは？

シャルソンの仕組みを使った東北応援プロジェクト。本来のシャルソンはスタートとゴールが同一の場所であることが多く地域内を巡るものだが、ウルトラシャルソンでは「被災地を線でつなぐ」ことを一つのテーマとし、自然を満喫しながら人々と触れ合い、移動し続ける。

第1回目となる今回は釜石から気仙沼までの間を3区間に分け、幹線道路およびその周辺を走ったり歩いたりしながら復興のシンボルやそのまま残された地域を訪問。各地を線でつないで「発見」したものをSNSを通じて発信し、そこで生活する人々とも交流しながら、震災被災地の状況や心情といった「いま」を伝える。一日あたり30kmから45kmの行程。

また、各区間の「ゴール」後に、震災発生から各地域で活躍した首長やボランティア関係者などに講演をいただき、ランニングと同じタイムラインに被災後の状況を投稿していく。講演後は地元の方々と交えて交流会を開き、一緒に楽しい時間を過ごししながら、それぞれの体験を語り理解を深める。

2. 実施スケジュールと参加人数

[日時]

2014年8月24日（日）～28日（木）

[場所]

釜石～気仙沼間の沿岸およびその周辺

[概要]（人数カッコ内 左＝ラン参加人数、右＝講宴会参加人数）

8月24日（日）釜石に集合。ウォーミングアップとして釜石市内の被災地（悲劇と奇跡の鵜住居）訪問およびウルトラシャルソンオープニングセレモニー。（15人 / 25人）

8月25日（月）釜石～大船渡シャルソン。（11人 / 19人）

8月26日（火）大船渡～陸前高田シャルソン。（15人 / 15人）

8月27日（水）陸前高田～気仙沼シャルソン。（15人 / 30人）

8月28日（木）気仙沼大島ツアー。亀山登頂。（9人）

3. 企画から実行まで

3.1. シャルソンの誕生と急成長

シャルソンの原型である「経堂マラソン」を実施したのは2012年2月。その仕組みは参加者内で評判となり、「また参加したい」「他の地域でもやってみたい」との声が多数あった。また、そのイベントの楽しさが、経堂マラソンの趣旨通り、SNSを通じて全国へ広がった。

参加者の一人だった株式会社スコップの山名清隆さんが水平展開を提案。横浜での市民会議に佐谷恭を招き、日産自動車が取り組む「思いやりライト運動」の企画として横浜シャルソンを行うことになった。横浜でのイベント企画時に、分かりやすくオシャレな名前をつけようとFacebook上でプレストをし、山名さんのアイデアで「シャルソン」という言葉が生まれた。同時期にランニングで起業したい女性から佐谷に相談があり、シャルソンの企画を勧めた。これが3つ目の企画となり、墨田シャルソンとして実を結んだ。

横浜と墨田の話が進展している最中、シャルソン企画が急速に伸びていく予感があったため、2012年4月1日にご当地シャルソン協会を旗揚げ。「まち」を盛り上げる方法論として確立することと、同年中に10回開催することを決意した。シャルソンはその後、急速に知名度を増し、2014年8月までの2年半で各地で約50回開催された。

3.2. 被災地への思い

シャルソン創始者の佐谷恭は、もともと東北地方にはほとんど縁がなかった。学生時代に青春18切符を使い東北全県を訪問し、その後出張などで訪れたものの、東日本大震災の津波被災地との継続的な関わりはなかった。

震災後は自ら運営する飲食店（パクチーハウス東京）とコワーキングスペース（PAX Coworking）の立て直しで「それどころじゃなかった」。リアルタイムでテレビ放映された津波の様子は鮮烈で、気にはかけていたものの、その時とっていた行動は、店内における募金活動（追パク（ついぱく＝パクチーのおかわり）募金や琥珀工ビス募金）だけであり、自ら動くのではなく、かろうじて意識を向けるにすぎなかった。

震災から2ヶ月後の2011年5月、以前講師を勤めたことのある明治学院大学の平山恵准教授からメールがあり、「東北に行ってほしい」と書かれていた。力になれるならいつか行ってみたいという旨の返答をしたら、次のメールでは翌週に日付指定で行くように「指令」が書かれていた。

それを読み終わった時、店のこと（≡自分のこと）よりも大切なことがあると

直感的に感じ、東北に行こうと決めた。この決断の背景には、震災直後の東北に支援やビジネスで赴いたお客さんからたくさん話を聞かせてもらっていたことがある。どうしても分らないが、東北から自宅に帰る前にパクチーハウスに立ち寄る人がたくさんいた。常連さんがたくさん報告に来たわけではない。初来パク（パクチーハウスに来ること）を果たし、初めて会う僕に状況を熱く語る人ばかりだった。

そして一週間、東北大学医学部の教授のプロジェクトを手伝った。南三陸の中学校の体育館に泊まり、目の前で身内の死を知って泣き崩れる人を見たり、広範囲に全てを失った仙台平野を訪れたりした。ランニングを始めて一年ほど経っていた佐谷恭は、情報も交通手段もなかった仙台市若林区東部に行き、打ちのめされた。

その後、年に1-2回は東北を訪れようと決めた。大学の後輩である久保田崇さんが縁もなかった陸前高田の副市長に就任したので励ましに（飲み）に行ったり、コワーキングの仲間を連れて石巻の様々な立場の人の意見を聞きに行ったり（飲んだり）した。シャルソンを牡鹿半島でやりたいという田上百合子さんと奥村政佳さんを手伝った（飲んだ）。

3.3. ウルトラシャルソン

この間、シャルソンが自分たちの地域を想う意欲的な人たちによって急速に発展した。佐谷恭は創始者として可能な限り企画を手伝い、いろいろな地域のシャルソンに参加した。イメージすらなかった地方の小さな町の、いたるところに魅力が溢れていること、シャルソンでそれを発見できることを身を以て知った。そして東北にシャルソンの文化を根付かせることは、とてもポジティブな形で復興支援になるのではと徐々に考え始めた。

牡鹿シャルソンに参加したとき、現地まで行くバスの時間が合わず、石巻駅から30km走ってみることにした。夜のパーティで地元の人と話すと、最初のうちは「よくそんなに走るねえ」と言われたが、やがて「あの日俺も歩いたんだよ」と語る人が現れた。図らずも被災者のあの日を追体験したことが分かった。また、走るからこそ浜と浜の位置関係が分かり、そこには異なる文化があることも知った。場所と場所を線でつなぐだけで、価値があるような気がした。

やるまではどんな意味を持つかは分からないし、やる度に意味が変わるかもしれない。ただ、場所と場所、人と人とをつなぐことは、これからの時代に大きな価値を生むはずだと思った。こうしてウルトラシャルソンの発想を思いつくことになった。

何から手をつければいいのかは全く分からなかった。ウルトラシャルソンについて質問してくれた人にも、分かりやすく伝えることが特に最初のうちはできて

いなかったと思う。東北で交流を持った仲間の一つずつ伝えていった。

頭で考えても企画は「進展」していない感じがあり、ずるずると時間が過ぎた。協力を依頼した人に、次なる具体的な要請ができずもどかしかった。プレスリリース等を何度か作り、妄想を育て、「発表」した。シャルソンの体験者たちが、それに応えてくれた。多くの人の応援をもとに「やるしかない」と奮い立った。

何度か行き来して地元の方々のあたたかい歓迎をうけたことで、被災者に大変ですねと悲惨さを何度も確認するだけが被災地支援ではないと感じてきた。まだ家に帰れず苦労している方も多いのは事実だが、生活の中に楽しみや喜びがあるのも確かだ。ウルトラシャルソンはこうしたポジティブなものを増幅させたいという思いから企画をした。8時間走って被災地を線で繋ぎ、8時間飲食して地元の方と語り合い、8時間寝るというまさにウルトラな日々だ。



4. ルート

釜石～鵜住居（うのすまい）	約15km
釜石～大船渡	約35km
大船渡～陸前高田	約33km
陸前高田～気仙沼	約42km

シャルソンはルートを決めずに自由に走るのが通常だが、ウルトラシャルソンにおいては個々人に裁量を持たせつつ、実行委員会がその都度ポイントを提案しながら進んだ。



5. 報告会の開催

ウルトラシャルソンを継続しその価値を伝えるため、そしてその結果として東北に関心を持つ人が増え、一人でも多くの人が東北を訪れるようにするため、ウルトラシャルソン報告会を各地で開催しています。

2014年9月実績：16回（4ヶ国：日本、香港、フランス、イタリア）

9月28日 17:00-	東京: PAX Coworking
9月24日 18:15-	南三陸: 南三陸さんさん商店街（南三陸町観光協会 / 南三陸ふっこう青年会）
9月23日 19:00-	倉敷: ゲストハウス有鄰庵
9月23日 15:00-	倉敷: 雑貨カフェ ranaq（ラナキュ）
9月19日 1:00-	東京: 居酒屋「ずーとろ」
9月18日 10:00-	香港: Good Lab Coworking（好單位）
9月16日 19:00-	Rome: Le Lanterne
9月16日 13:00-	Rome: Coworking SPQwoRk
9月15日 20:00-	Paris: Mutinerie Coworking
9月15日 16:00-	Paris: Montmartre
9月9日 15:30-	新大阪: CoWorking space Crossing
9月7日 6:30-	石川: cafe? IKAGAWA DO（金沢大学横） （朝ラン&ビールの会@金沢参加者向け）
9月5日 18:30-	石川: 野々市市文化会館（野々市シャルソン参加者向け）
9月4日 20:09-	世田谷: PAX Coworking （経堂の商店街を活用しようワークショップ参加者向け）
9月3日 20:09-	文京: 我楽田工房（旅育推進メンバー向け）
9月2日 13:00-	世田谷: PAX Coworking （バクチャーハウス東京スタッフとPAX Coworkingメンバー向け）

10月以降も可能な限り世界各地で開催予定です。

3年で震災の記憶は風化するといわれることが多いため、3年経ってから始めたのがウルトラシャルソンです。まだまだ復興に莫大な時間がかかることを知っている人は日本国内でも少なく、海外では皆無に等しいです。

ただ、鮮烈な映像の記憶として大津波を覚えている人が多く、その場所の現状を知ることについての好奇心は旺盛です。語り伝える人がいないというだけだと思います。

東北が日本の食材の供給源という前提で話をすると、日本食ブームに沸く人々から強く関心を持ってもらえます。

報告会で使用しているプレゼンテーション資料はこちら：

<http://prezi.com/3y00cjcaxcs/ultracialthon-1/>

6. 参加者の声

6.1. 山戸恵利加さん (京都)

◎8/24

ウルトラシャルソンのウォームアップラン。釜石のランナーの方に説明をしていただきながら走りました。以前は住宅がたくさんあったという場所には何もありません。目的地の絆ハウス(震災前は防災センターだったところ)で両川さんという方に当時のお話を伺って、写真をたくさん見せていただきました。

ウォームアップランのあとは釜石市役所で佐々木総合政策課長のご講話。そして今回のウルトラシャルソンにご協力くださっている市役所の方々も一緒に前夜祭へ。

明日は大船渡まで走る行程。走力、大いに不安ですが...楽しみです！
スタートは7:30！

◎8/25

ウルトラシャルソン初日は釜石→大船渡ラン。釜石市役所の皆さんにお見送りいただき7:30に釜石を出発。5kmほど走ったあと、平田から三陸までは、復興のシンボル、南三陸線で移動。そのあとは大船渡までの峠越えラン。工事関係者の方、住民の方、様々な方が声をかけてくださり、関心を向けてくださいました。完走後は、大船渡海来プロジェクト代表の新沼さんと大船渡市商工港湾部長の三浦さんのご講話をいただきました。

プレハブの商店街、プレハブの屋台村。震災から3年半、当時とは違う新たな問題も出てきているというお話でした。改めて、自分の故郷を省みる時間になりました。いやしかし大船渡の夜は本当に楽しかったです！明日は陸前高田まで走ります！当然、既に走る自信は喪失しています。

◎8/26

ウルトラシャルソン2日目は大船渡→陸前高田まで約30kmのラン。本日は陸前高田市役所から森さん、宮武さん、桑原さんがランナーとして参加してくださいました。まずは9km走って「居場所ハウス」へ。アメリカの企業からの寄付によって創られた、地域の人が集える場。そこで地域の方のお話を伺ったあと、キャピタルホテル1000へ。震災で全壊してしまい、高台に場所を移して営業を再開されたホテルです。お茶とエナジードリンクをたっぷりご用意いただき、後半ランへのエネルギーをいただきました。

その後は陸前高田市役所の仮庁舎を訪問し、久保田副市長から陸前高田の復興計画についてお話を伺いました。陸前高田は震災によって最も甚大な被害を受けた地域のうちの一つ。「壊れた」のではなく、「消えてなくなった」のだという久保田さんの言葉がその状況を顕わしているのだと思います。現在、盛り土をして土地全体を高くする工事が行われています。土を運ぶために巨大なベルトコンベアが設置され、重機が絶え間無く行き来しています。また、他方へ目を向けると家があったであろうそこここに花が手向けられています。仮設住宅から出られた方はほんの一部というのが現状です。「あと5年」復興へ向けての予定期間。被災者にとってあまりに長い期間、行政にとっての闘いの期間でもあります。

◎8/27

ウルトラシャルソン3日目、最終日は陸前高田→気仙沼へ約42km狂気のラストラン。8時にスタートして奇跡の一本松まで15km。約7万本もの松が流された高田松原は地盤が80cmも沈んだそうです。一本松からは唐桑半島にあるキッチンひがしやまへ16km走り、ランチのあとは峠をまたいくつか越えて気仙沼復興商店街付近のフェリー乗り場へ11km、そして歓喜のゴール!!3日間合計で約107km、ウォームアップランを含めると約120km走りました。

ゴール後はシェアオフィスco-ba kesennuma、ともしびプロジェクト代表の杉浦恵一さんのお話を伺いました。日本三周ヒッチハイクの旅の途中で震災が起こり、お世話になった東北のために何かしたいと、震災一週間後に単身トラックで物資を運搬。その後様々な活動を経て現在は気仙沼に移住してシェアオフィス、シェアハウス、キャンドル工房などを運営されています。外部からの移住者でありながら、地元の人々の信頼を得て、地域の雇用、ひいては新たな産業を生むというところに至るまで活動を継続されている杉浦さん。今や気仙沼の「中の人」として復興への大きな一翼を担われています。

◎8/28

ウルトラシャルソン最終日は気仙沼大島での亀山登山。雨がしとしと降り、とても寒かったので、大島の売店でゴミ袋を購入し、皆でそれを着用しての山登りでした。酷使した足に更に追い打ちをかけるこのアクティビティは、寝食を共にしながら走り続けてきた皆さんと過ごす最後にふさわしかったと思います。

自分の足で走り、走るスピードで見て感じて、それぞれの地域で活躍されている方のお話をうかがいながら、皆で現在と未来を考える時間が持てた今回のこの体験は、とてつもなく貴重なものでした。できるだけ多くの人にウルトラシャルソンで経験したことを伝えたいです。そして継続してコミットしていきたい。

人生で一番たくさん走って、たくさんの人に出会えて、めちゃくちゃ楽しかったです！！皆さん本当にありがとうございました。

◎8/29

昨日ウルトラシャルソンを終えて仙台に移動したあと、気仙沼で別れたばかりの成田くんを呼び出して右田さんのお店で打ち上げ。翌日懲りもせず再び成田くんを捕獲して松島で遊びました。成田くん、遊んでくれてありがとう！それでは京都に帰ります！皆さんありがとうございました！

参加後レポート

・ 実際走って感じた被災地の感触

盛り土、ひっきりなしに往来するトラック、舞い上がる土ぼこり、家の区画だけが残された空き地、そこに手向けられた花、仮設住宅、使われなくなった線路、真新しいBRTの駅、日本の他の地では見られないこれらの光景が、被災地ではまるで当たり前のことのように広がり、別の世界に来てしてしまったかのような錯覚を覚えながら走り続けていました。震災から3年半経った今、真新しいものと復興に向けて動き続けているものと震災当時のまま横たわっているものが混在している現状が、私たちが伝えるべき東北の「今」なのだと感じました。

・ 交流や講話について

<地域の方々との交流について>

住民の方や工事現場の方、立ち寄ったお店の方など多くの方が「何しているんですか」と関心を寄せて尋ねてくださいました。ウルトラシャルソンの趣旨とともに釜石から気仙沼まで走っていることを伝え、「がんばってね」と温かく声をかけてくださり、そのことにとても力をいただきました。

<参加者同士の交流について>

全国様々な場所から集まった参加者は、お互い初対面という人も多かったのですが、一日のほとんどを共に走り、経験や思いを共有する中で、急速に関係が深まっていきました。地元の参加者の方々と走ることができたのも、当時と今を知るためにとても良い機会になりました。

<講話について>

-8/24 釜石市鶴住居地区住民 両川吉信さん

津波発生時、両川さんは奥様と一緒に自宅の屋上に避難し、まちのその凄惨な光景をカメラにおさめました。釜石市鶴住居地区一帯は、そのとき、建物の2階の天井まで浸水し、防災センターも小学校も住まいも全て浸水して流されてしまうほどの甚大な被害を受けたというお話を、両川さんご自身が撮影した数々の写真をもとに伺いました。私たちが走ってきたその地域には広範囲に渡って草が生い茂っていたのですが、まさにその辺り一帯が、以前は住宅が立ち並んでいた居住地であったという事実には驚き、途方もないことが起こってしまったのだと改めて感じました。

-8/24 釜石市総合制作課長 佐々木勝さん

震災を機にコンサルティング会社から市役所に転職された石井重成さんのコーディネートのもと、佐々木課長からお話を伺いました。釜石市の取り組みとして興味深かったのが、復興コーディネーター「釜援隊」というプロジェクトです。Uターン・Iターンを中心とした方々により結成された「釜援隊」が市内外をつなぐ様々な活動をされているそうです。この日の夜の宴会にも「釜援隊」の方が数名いらっしやっており、ウルトラシャルソンのような活動を受け入れ、支援してくださっているのを感じました。その他にも、未来創造塾、釜石百人会議など、様々な取り組みがなされており、市民を集め、市民の力で復興していこうという釜石市を強く感じました。

-8/25 大船渡海来プロジェクト代表 新沼崇久さん

「大船渡海来プロジェクト」を立ち上げた新沼さんと、大船渡市商工港湾部長の三浦勝朗さんにお話を伺いました。飲食店を経営されている新沼さんは、誰もが悲しみに暮れる震災直後の4月には営業を再開され、12月には「復興大船渡プレハブ横町」をオープンされました。さらに、「子供たちに、大船渡のよいところを知って、世界に発信する存在になってほしい」と大船渡海来プロジェクトを始動。「壊れたものを元に戻す」という視点ではなく、「大船渡を世界に発信していく」、「次世代まで見据えたまちづくりをしよう」という考えが、新沼さんの言葉一つ一つに顕われていました。新沼さんの強いリーダーシップと、彼に賛同する人たちの力により、復興へ向かう熱気のようなものが一帯を取り巻いているように感じられました。三浦さんは「大船渡の関心人口を増やしたい」とおっしゃっていました。その言葉から、年月が経つごとに否が応でもすすむ人々の関心の風化に危機感を持っていらっしゃるのだと感じました。「大船渡のことを時々でいいから思い出してほしい」という言葉が強く心に残っています。

-8/26 陸前高田市副市長 久保田崇さん

震災当時、内閣府で勤務されていた久保田さんは、2011年8月、陸前高田市副市長に就任され、復興事業の陣頭指揮を執っていらっしゃいます。陸前高田は津波により壊滅的な被害を受けた地域の一つ。「壊れた」のではなく「消えて

なくなった」のだという久保田副市長の言葉が当時の状況をよく顕しているのだと思います。市の全世帯のうち7割以上が被害を受け、沿岸の高田松原地区の7万本もの松がたった1本を残して流失したまちにはまさにゼロからの構築をすすめている風景が広がっていました。ゼロになったまちを再構築する上で、むしろゼロだからこそ実現できることがあるのではないかと。久保田さんのご講話の中でも、「ノーマライゼーションという言葉のいらないまち」を目指して、誰もが住みよいまちづくりを進めているというお話がありました。象徴的なのはやはり全長3kmにも渡る巨大なベルトコンベア。山を切り崩して土を運び出し、12メートルのかさあげをした所に居住地をつくるという復興計画は、従来のやり方では10年かかってしまうところが、土を運ぶためのベルトコンベアを設置することで3年に短縮できるということです。仮設住宅から出られた人はまだほんのわずかという中、安全な住まいで生活を送る、という最も基本的で大切な環境を皆が得られるまでには5年という年月が必要だということです。5年という期間は住民にとってはあまりに長く、行政にとっては闘いの期間です。

-8/27 co-ba kesenuma、ともしびプロジェクト代表 杉浦恵一さん

高校時代に交通事故に遭い、それをきっかけにヒッチハイクの旅を始めた杉浦さんは、日本三周の旅の途中で震災が起こったことで旅を中断。旅の途中で世話になった東北のために何かしたいと、震災からわずか一週間後に単身トラックで物資を運搬されました。そこから継続的に活動し、現在は気仙沼に移住してシェアオフィスco-ba kesenumaやキャンドル工房を運営されています。外部からの移住者でありながら、想像を絶する行動力と求心力で内外多くの人を巻き込み、地域の人々の絶大なる信頼を得て、今や「中の人」として活躍されています。震災後の混乱の中、とにかく自分ができるところをと、杉浦さんが実行し発信し続けてきたことが、キャンドル工房での雇用創出につながり、外部の多くの人の関心をひきつけることにつながっています。実行すること、発信すること、そしてそれを継続していくことが、何らかの形で確実に実を結んでいくのだということを体現しているカリスマ。その存在によって、心を奮い立たせている人がいることを身をもって感じました。

・ ウルトラシャルソンに参加して

私はこれまで、一日最長でも20km程度と、長い距離を走ったことはありませんでした。しかし、終えてみると合計120kmもの距離を走り抜いていました。5日間にわたって、寝食、見聞きするもの全てを共有してきた仲間が存在なしではあり得ないことでした。このかけがえのない出会いに心から感謝しています。本当に楽しかったです。信じられない距離を走り、走るスピードで見て感じて、それを発信することで関心を持つ人からの反応を得て、また伝える使命を感じながら足を進めていく。ウルトラシャルソンがもつ意義と可能性を、実際に参加してみてより強く感じました。これから私は、この経験を多くの人に伝えていきたいし、今後も継続してコミットしていきたいと考えています。こ

の素晴らしい試みに関わることができて本当に嬉しく思っています。

・最後にこれだけは伝えたい

シャルソンは信じられないくらい走って、信じられないくらい笑って、信じられないくらい飲み食いするイベントです。早朝から夕方まで走って、その後深夜まで、気絶するまで飲み続けるのがシャルソンです。終わって見たら3kgくらい体重が増えているのがシャルソンです。いろんな人に出会って、今と未来の話をして、バカな話もいっぱいして、「また会いましょう」と言って次の地へ走っていける素敵なイベントです。第2回ウルトラシャルソンは気仙沼から石巻を舞台として11/1〜3に開催されます。次回もたくさんの人に出会えるのを楽しみにしています。

ご講演いただいた両川さん、佐々木さん、新沼さん、三浦部長、久保田副市長、杉浦さん、実施にあたりコーディネートしてくださった釜石市役所の石井さん、地元ランナーとして参加された今野さん、三上さんご夫妻、陸前高田市役所の森さん、桑原さん、宮武さん、そして菅野さん、おいしいご飯とおいしいお酒をご提供くださった皆さん、応援してくださった東北の方々、ウルトラシャルソン実施にあたってご協力くださった皆さん、共に走った朴さん、小物さん、草間さん、ノリさん、加藤さん、牧野さん、やすこさん、Brian、ひろさん、素敵な写真をたくさん撮ってくださった石川さん、伴走車で私たちの安全を見守り、給水ポイントを作ってくれた田上さん、成田くん、ウルトラシャルソンに参加させてくださった小澤さん、ウルトラシャルソン発起人、私たちのリーダー佐谷恭さん、皆様に出会えたことに感謝します。本当にありがとうございました！

6.2. 上田拓明さん（京都）

東北沿岸の津波被災地周辺を自由に走って復興を応援する「第1回 Ultra Cialthon（ウルトラシャルソン）」に参加した。

そもそもシャルソン（ソーシャルマラソンの略）とは・・・

- ①開催地を走って（または歩いたり）、感じて、それを発信する。
- ②発信することで参加者他と情報を共有。
地元の人も地元だから知らないことは沢山。
- ③街を再発見。また発信することで場所に人が集まり、人と人が繋がる。

というもの。

今回のウルトラシャルソンとは・・・

釜石から気仙沼までの間を3区間に分け、幹線道路およびその周辺を走ったり

歩いたりしながら復興のシンボルやそのまま残された地域を訪問。各地を線でつないで「発見」したものをSNSを通じて発信し、そこで生活する人々とも交流しながら、震災被災地の状況や心情といった「いま」を伝える。一日あたり30kmから45kmの行程。

また、各区間の「ゴール」後に、震災発生から各地域で活躍した首長やボランティア関係者などに講演をして頂き、ランニングと同じタイムラインに被災後の状況を投稿する。講演後は地元の方々と交えて宴を開き、ランナーとともに一緒に楽しい時間を過ごししながら、それぞれの体験を語り理解を深めるというもの。

今回、私は3区間の全行程協賛企業スタッフとして参加した。

実際被災地に行って現地の人、物事を見て、聞かないと分からない現実がある。

走り（歩き）、街を見て、そして絶対にテレビでは聞けない音を聞く。走ること、そして様々な濃い方々と交流する、そして宴会もすることで「参加しないと見えない現地を見れる」それがウルトラシャルソンにしかない価値だと思う。

一見狂気の距離、狂気の日程、狂気の宴会だがこんなに楽しく、意義深いマラソンを他に知らない。出来ることならこの企画に多くの人に参加してほしいと思う。

現地で走りながら感じたことをまとめた。

釜石、大船渡、陸前高田、気仙沼、共通の問題は人口流出、人手不足。復興需要により建設業界がほぼ独占する形で求人倍率は約2倍。一見雇用はあるのだが、実は職種が偏っているため、実際は女性、高齢者も含めた雇用問題も根深い。未だに8割から9割の人が仮設住宅から出られていない。整地も追いついていない。震災以前より人口の流出は震災以前からの課題だった。被災したことで更に拍車がかかった。

総人口2万人の内死亡、行方不明合わせ1800名の陸前高田市、久保田副市長のお話を拝聴した。1/10人口が街から消えた。少子化も他の地域に比べても深刻だ。市役所も被災、1/4の職員も被災し亡くなった。沿岸沿いにあった都市機能は崩壊。まさに「消えてなくなった」。本来10数年のスパンで行う修繕、再建築等々の仕事が全て無くなったことで莫大な量の”TO DO”が山積しており、人手不足は未だ課題。再建の為各都市から応援が多数来ている。

奇跡の一本松のある海岸は80cm程地面が下がった。山の土砂を削り海岸付近の地面を高くする。トラックで運搬すると10年、今は近未来的なコンベアが山まで張り巡らされ3年計画で地面を上げる。所々流された跡地に花が植えられ花畑が出来ている。

家が流されたが、元々あったところに住みたいと思う住民は多い。

改めて思った。何人の人が流された後住むのか、居たとしたらその人の為のインフラ整備にどれほどの復興資金が使われるのか、そしてそれを誰が負担するのか。子供たちに返済させるのか。コンベアーも使用後は撤去される。あれほどの大型プラントを解体するのにどれだけの費用がかかるのか。そして誰がお金を返済するのか。

「復興」とは何か。何を持って「復興」というのか。走りながら一番それを感じそして考えた。

「被災地の人、地域はいつまでも被害者であり、行政にぶら下がっている時期はとっくに終わった。いつまでも被害者のままではいけない。地元が良い街づくりに向けて立ち上がらなければ他の地域に結局負ける」と言った人がいた。

何か、ある種の歪みのようなものを感じた。

・ 津波当時実際被害を高台からみていた職員であり、また今は語り部として話をしている武蔵さん

被災後2週間くらい「感情」を失った。つらい記憶がフラッシュバックする。考えたくない。話したくない。だけど生かされた自分は当時のことを後世に伝える義務がある。嫌だと思ったとき、誰かが「伝えてくれ」と耳元で話された気がした。

当時の生々しい話を聞いた。彼女から被災した経験をもとに3つお願いがあると言われた。

①どこかに行くとき、指定がない限り車はすぐ出られるように切り替えしてバックで止めるようにしてください。

②家族内で有事に備えたネットワークづくりをしてください。必ず遠くの親戚の電話番号も入れておき、災害ネットワークを整備しておいてください。

③「津波てんでんこ」を必ず守ってください。(今回もたくさんの方が家、家族の心配の為、戻って亡くなった。無くならなくてすむ命がたくさんあった)
<http://dic.nicovideo.jp/a/%E6%B4%A5%E6%B3%A2%E3%81%A6%E3%82%93%E3%81%A7%E3%82%93%E3%81%93>

実際に被災された方の後悔がこの3つ。私は胸に刻みそしてこれを皆に伝えたい。

- ・ 「故郷を走りたい」と参加され一緒に陸前高田～気仙沼まで走った菅野さん

震災の津波によって故郷の陸前高田で母親が被災した。そして行方不明になった。何度も何度も遺体安置所である体育館に母親を探しにいった。見つからない。結局あきらめかけた8月、DNA鑑定によって母親は千葉県で見つかった。当時あまりの遺体の数によって遺体を火葬するにもどうしようもなく、どんどん遺体は南へ運ばれていった。母親は遺体安置所に実は居たが損傷が激しく見分けが付かなかった。当時の記憶は生々しく頭に残る。戦争中を連想する。あれほどの多くの遺体を見ることは人生で想定していなかった。五体満足である遺体は珍しい。殆どが損傷が激しく目を覆いたくなる。赤ん坊、子供の遺体だけは耐えられなかった。当時遺体安置所は子供から大人まで誰でも出入りしていた。そのような光景は二度と見たくない。

「興味を持って、来てくれてありがとう」年齢は20歳も私より上だろうか、そのような年下の私のような者に頭を下げた謙虚な姿が印象的だった。

- ・ 震災直後から復興に飲食店側からをメインとして注力してきた大船渡の新沼さん

震災直後からたくさんの人に助けてもらったその恩義をただ返したい。赤字でも要望があれば大船渡の食べものを引っさげ県外での出店もしてきた。

今後港沿いに自身の飲食店の場所を移し、大船渡にしかできないことを発信、人を集めたい。大船渡は世界に3つしかない漁場の一つ。必ず世界の大船渡にして見せる。ポジティブな志の高さが印象的。出してくれた大船渡の玉手箱。入っている牡蠣とホタテ。味が忘れられない。

- ・ 被災地復興に尽力し、気仙沼に根付いた事業を手掛けている杉浦さん

正に人間力とは何かを考えさせられた。震災時日本3周ヒッチハイク中に地震があった彼。何かをせずにはいられない。何かをしたい彼を応援してくれる人間が沢山いた。外部である熊本生まれ、愛知育ちの彼を彼の生涯で培った人柄に今まで出会った人がサポート、資金援助。ともしびプロジェクト、シェアハウス、シェアオフィス、キャンドル工房など色々な事業を手掛けている。

動いている人間には運も引き寄せる力がある。偶然は必然。彼の必要な物事を引き付ける力は尋常ではない。店の看板も今後つける予定とのことだが、きっとふらっと看板屋が現れ助けてくれることと思う。求心力のある人間は常識を越える。面白い話に延々と聞いていたかった。地元の人に受け入れられる。外部からの力が、地元で根強い人間の力をも引き出す。

「地元を守ろう、盛り上げよう」と頑張っている地元の人、外から復興を盛り上げようと被災地に来た人、住民、事業者、行政の人、それぞれ多分全員が何

をもって「復興したか」というのは違う。

震災から3年たった今、地元の人々の力、そして外部からの関心は必要。今後は地域イノベーションを地元の人々が手を挙げて自分の足で歩く力そして当然外部からの力両方が必要。今後というより、もう既に必要なだろうと思う。

外部から来た私達は現地に来て、感じたことを「発信し、そして伝える」義務があると感じた。また被災地も含めた地方に向けて我々インバウンド業界の人間が出来ることはたくさんあると感じる。

6.3. 加藤武留さん（岐阜）

8月25日～27日にかけて、東北沿岸・震災被災地を走り、復興の現状を見て、発信するランニングイベント、ウルトラシャルソンが開催され、自分も全区間走破してきました。

...そもそもシャルソンって何？

Facebookを活用した、人と人、そして街を繋ぐランニングイベント！
実は全国各地で開催されてますよ！

詳しくはFacebookご当地シャルソン協会ページも見てね^o^↓
<https://www.facebook.com/cialthon>

ちなみに自分もさりげなく第一回岐阜シャルソンを開催しちゃいました！

今回はシャルソンの仕組みを発展させ、釜石～大船渡～陸前高田～気仙沼の各都市を走り、被災地の復興の現状を見て、現地の生の声を聞き、さらにFacebookなどを活用して発信し応援しよう！ということで、このウルトラシャルソンが開催されました。

これまで色々な所を旅しましたが、三陸沿岸はまだまだ未到達。この企画を知った時から気になっていました。

前月に

「まあムリやろ、仕事も忙しいシーズンやし」

と休み希望を書いてみたら

まさかフル参加が可能な休みが

これは行くしかないっ！と即座に申し込みました。

しかし今までのシャルソンとは違い、3日間毎日30～40キロを走る。しかも三陸のリアス式海岸を走る＝アップダウンが激しいことは容易に想像が出来るため、体力面はかなり不安...

そのため8月は空いた時間に走り込み、遂にこのウルトラシャルソン当日を迎えます。

第一回ウルトラシャルソン（前日）

いよいよ迎えた

ウルトラシャルソン前日

この日は昼過ぎまで岐阜で仕事のため、一旦東京へ出てから夜行バスでスタート地点の釜石へ乗り込む予定。

順調に仕事を片付け、まずは上京...

新幹線で向かう道中Facebookを眺めていたら、ほとんどのメンバーは前日現地入り→ウォームアップを楽しんでおります。峠越えのエグいコースだったようで、しかも結構な距離。（13キロくらい）

しかしこの日も現地の方のお話を聞けたり、楽しいランニング＆パーティーの様子がUPされており、盛り上がりをFacebookから感じられました。

久しぶりの東京では、昔からの友人Kくんを拉致し、お上りさん気分でアメ横周辺を徘徊。

夜は明日に向けて体力を付けるためにハンバーグを食べ、上野公園の裏手にある古風な温泉で仕事の疲れを癒しと、バスに乗るまでの時間をブラブラと。

東京で温泉！？と思われるかもですが、ここは真っ黒なお湯で、深く掘りまくれば出てくるようなそんじょそこらの温泉とは違いますよ～
↓天然温泉の六龍鉱泉

Kくんと別れ、翌日の朝食を調達。まだまだ時間はあるから、ちょいと喫茶店でのんびりしようと思ってメニューを見ると...

アイステイーが1000円！

なんちゅう高さや！

これが東京価格というやつですかね～

ゆっくりしたかったけど、バスの時間もあるからさっくりと飲んで、席を立ちました。

（なんか使い方間違ってるよね）

釜石へ向かうバスは二台続行で到着。えらい繁盛してるなあ～と思いつつ乗り込み、眠りにつきました。

時々眠っ...な一日目...

バス内で朝食と身支度を済ませると、丁度釜石に到着。
あまり眠れなかった...大丈夫やろか?と思いながらスタート地点の釜石市役所
に向かっていたら、途中で皆の宿泊地点、大町パンションを発見。
お久しぶり～なメンバーや初めまして!のメンバーと合流し、スタート地点
へ。

【釜石市役所～三陸駅】

釜石市の方々に見送られてスタート!
釜石市のカラー、ブルーのシャルソンTシャツを着て、国道45号線を走り出
します。
意外にと言っては失礼か、交通量はかなり多く、ランニングにとってはかなり
悪条件。さっさと駆け抜けます。
途中、釜石大観音を左手に眺めつつ、三陸鉄道の平田(へいた)駅に到着。

ランニングなのに、ん...駅?

ここからは、震災復興のシンボルでもある、三陸鉄道南リアス線に乗り込みま
す□なぜならこの先は道路状況としてはランニングには適さないということ。

やって来たのはとてもクラシックな外観の列車。ウルトラシャルソンの特別列
車??ではなく、普通列車でも一部、レトロ調の特別列車が充当されてるよ
う。

観光客を呼び寄せようと、必死の取り組みですね～

ちなみにみなさん、田舎のワンマン列車に乗り馴れてないのか、ほぼ全員が入
り口にある、整理券をスル～。

ちゃっかり自分は取りましたが、するとこの整理券にメッセージが...

「笑顔をつなぐ、

ずっと...」

ちょっとしたことかもしれませんが、心温まるメッセージであるとともに、
震災にも負けない力強さを感じました。

車内では特産品、お土産を売るおばちゃんが、沿線の観光案内も行なってお
り、活気に溢れています。長い長いトンネルと、その合間から見える三陸の海
に目を奪われながら、三陸駅に到着。

自分達と共に、バスで来たと思われる観光ツアーの方々も降りて行きました。

【三陸駅～綾里駅】

ここからまたランニング開始!

今度はグループを分けて走ります。

運良く(?)ペースがのんびりなチームで、ゆっくりとスタート。

交通量も少ない場所のため、ランニングには快適。随所で伴走車も写真撮影で
止まっているので、そこでは元気100倍!飛び跳ねてみたり、スキップしてみ

たり、カメラを見るたびに何かしてしまう、芸人魂全開のリアクションを披露しながら駆け抜ける大人達（笑）

もちろん後々になってこの行動を後悔することになるのは言うまでもありません（泣）

元々の地名は小石浜だったのを、改名して、誘客を狙う恋し浜駅を通過した辺りから、道は厳しい登り坂が延々と...

「もうアカン！どこまで続くねん！！」

↓

「あのカーブ曲がったらそろそろ頂上っぽくない？」

↓

「...ウツ、まだ登ってるし」

なんてやり取りを何回繰り返したことが...

周囲の風景も緑が深くなり、吹き抜ける風が涼しくなるとともに、海がどんどん下に遠ざかっていきました。

これって...登山だよね？

結局登り区間はほぼ歩き通し、ようやく頂点へ。下り坂になると現金なもので、足取りも軽やかに走り出します。

先行部隊には大きく差を離され、チェックポイントの白浜海岸へ到着。

到着したら、皆さん丁度海から上がったところでした。

自分も海道具は持ってきたので、最終日のクールダウンがてら、海水浴でもしようかななんて考えたりもしてたのでここはガマン！

ここまで来れば綾里（りょうり）駅近くの昼食ポイント、たんぼぼ食堂まではあと僅か。エネルギー補給に向けて走り出します。

【綾里駅～大船渡市】

昼食はドラゴンラーメン又は、ソバ冷麺の二択でしたが、自分を含めほぼ全員がソバ冷麺を選択。日本蕎麦をあの冷麺風に仕上げた、今までに食べたことがないメニューです。非常にサッパリして、とても美味！

蕎麦もこんな食べ方があるんだなあ～と、驚きました。

ここからもアップダウンが続く中を走りますが、大船渡湾に面した辺りからは平坦に、海沿いの道を快調に進みます。伴走車から、何故かこのチームがトップで走ってることを知らされ、ゆっくり行こか～とのんびり歩き始めます。

周囲を見渡すと、ここまでも同様でしたが海沿いに立つ建物は、比較的新しいものばかり。また一見して空き地か？と思えば、近づくと家の土台や塀などが

遺されており、震災前は集落であったことが想像出来ます。

荒れ果てたグランドの隣には仮設住宅で暮らす方も見えます。

市街に近づくと、デカイ建造物に圧倒されながら道は太平洋セメントの敷地を通り、盛川の河口を橋で一跨ぎ。

ここまで来ればゴールはもう目の前、工事車両が行き交う道を走り抜け、ゴールの菊水館に到着です！

まだゴールしていないメンバーを待つ間に、近くのコンビニへ。

とても暑いので、早々に

「ガリガリ君を食べるぞ！」

とメンバーに宣言し、意気揚々と乗り込むも

「...ないやんか」

見事に売り切れ（笑）

リンゴのシャーベットで喉を潤しました。

【大船渡で宴会】

全員が無事に合流し、少し歩いたところにある大船渡屋台村へ。

無国籍料理のKAIZANにて、大船渡市商工港湾部長の三浦さん。大船渡海来（みらい）プロジェクト代表、新沼さんからお話を頂きます。

震災から3年が経ち、まだまだ新しい問題が発生している現状。

例えば仮設住宅に関しても、未だ大半の方が仮設住宅での生活を余儀なくされており、それに伴って学校の校庭などを仮設住宅に使っているため、子ども達も満足に体育の授業が出来ない。

また震災のことが頭に焼き付いて離れないなど、心に重大なダメージを負ってしまった方のケアも進んでいません。

その中でも、新沼さんは震災で自分のお店を流されながらも再び出店するだけでなく、忘れかけてしまう地域の文化を子ども達に伝えようと、「大船渡海来プロジェクト」を立ち上げ、今後の未来に繋がる活動に力を注いでいます。

大船渡海来プロジェクトについて、詳しくはコチラ

震災をきっかけとして、人と人の絆と、地域文化について考え、また実行するその姿には、とても勇気づけられました。

また、三浦さんの

「意識の中では風化してしまってるかもしれないけれど、時々で良いから被害にあったこの地域のことを思い出して欲しい」

この言葉、重みを持って心に響きました。

そして夜は屋台村でパーティが始まります。

ここは沖縄料理から大船渡の海産物まで、様々なお店が揃い、また各お店の料理を少しずつハシゴしやすいようにフードコート的なスペースになってます。
(勿論店内で落ち着いて食べることも出来ます。)

パーティ中にはこの日の夕方から参加のカップルが、入籍して4日目、しかも国際結婚！というおめでたいことも判明し、盛り上がります。

末長くお幸せに！！

二次会はKAIZANに再び戻り、皆さらに吞みます。

(自分は弱いので、一次会のオリオンビール一杯で充分酔いがまわっております)

ここで店主の新沼さんから大船渡の玉手箱を頂きました。
コンロで充分蒸し焼きにして、蓋をあけると...

「おお～！」

なんと大きな帆立と、牡蠣がたっぷり入っています！

味も最高に美味しい！

頂きつつお話を聞きましたが、津波によって港湾の人工建造物が流されたことによって、海としては元の自然な環境に近い状態になり、震災前よりも良質な海産物が取れるようになったそうです。

自分の中では震災で漁業も大きなダメージを受けたというイメージしかかったので、こういう側面があることを知れたのは驚きを感じました。

夜も更けて、宿に戻ると速攻で寝る！

まだまだ始まったばかり、翌日に備えます。

まるで別世界？

爪痕を目のあたりに

【大船渡～居場所ハウス】

2日目の朝はしっかり布団で寝たためか、スッキリとした目覚め。

所用のため一旦東京へ向かうメンバーを見送り(また3日目に戻ってくるというフットワークの軽さに脱帽) 少々肌寒いなかスタート。

この日は陸前高田市の職員の方も共に走ります。

まずは、「居場所ハウス」を目指して走ります。

昨日よりはマシではあるものの、細かくアップダウンを繰り返しながらのラン。

横目には、JR大船渡線が震災の影響でバス路線と化した、「BRT」の専用道路が寄り添い「あそこを走れたら楽やのになぁ～」などと叶わぬ希望を口にしつつ大人しく走ります。

そして居場所ハウスに到着。新しいものの、古民家のやすらぎも感じられる建物が暖かく迎えてくれます。

ここは震災からの復興の拠点としての役割のため、陸前高田市の古民家を移築、改装されたということです。ボランティア活動の拠点や、地域の方々の交流の場など、多目的に利用されているということです。休憩していると、地域の方もお茶しにやってきました。地域の方とお話しし、お菓子を頂いたり、剣玉によく似たおもちゃで遊んでみたり、しばらく使われてなかったであろうピアノを触ってみたりと思い思いに過ごし、エネルギーを回復しました。

居場所ハウスについてはこちら
近くにきたら、よってみてけらっせん！

【居場所ハウス～陸前高田市役所】

ここからまたチームに分かれ、走り出します。

程なくして通った小友駅周辺のエリアは、広田半島の付け根で、標高が低い地域。

震災時には津波が両方向から襲いかかった場所でもあります。

道はあるものの、辺り一面何もない光景に驚きます。

さらに進むと、地面の嵩上げ工事の現場を通ります。津波に負けないように、12mもの高さの土台を作り、その上に街を再形成するよう。

そして昼食ポイントの農家カフェ・フライパンに到着。他にも選択肢はあったのですが、時間差はあれど、ほぼ全員がここを選択しました。

偶然地元のローカルTVの取材があり、主催の佐谷さんは少々緊張気味でトーク。

放送が楽しみ！（見れないけど）

次の目的地は津波により全壊、その後移転したキャピタルホテル1000。

めいめいに分かれて走る感じだったので、あまり皆が通らなさそうな道をあえて選び、突っ走ります。元々は住宅地であったと思われる空地のど真ん中の未舗装路を走り、途中泥地に足を取られそうになりながらも寄り道したりしていたら、いつの間にか一人、また一人と合流。ホテルに向けての登り坂をみんなで駆け上がります。

ホテルでは冷やされた飲み物を有難く頂き、一休み。

高台に作られたこのホテル、陸前高田の市街地が一望出来ます。

といっても広がるのは一面に復興工事の現場。

トラックが行き交い、今の時期しか見れないという、山から削り出した土を嵩上げ現場へと一気に輸送するためのベルトコンベアや、巨大な重機が新しい街を作るために動きます。

「まるでSF映画の世界？」

しかしこれが被災地の現実。

見回す全てが工事現場という、何か別世界に来たような違和感を、人生で初めて味わいました。

ここから陸前高田市役所までは、ダンプが巻き上げる砂埃にむせ返りつつ、この工事の真っ只中を走ります。途中工事のため少々道に迷いつつも、無事に全員が市役所に到着。

ここでは久保田副市長より、講演を頂きます。

震災によって市役所も流され、職員の方も大勢が犠牲になってしまう中、残された職員と、各地から緊急に集まった臨時職員で復興に取り組みます。

しかし人手不足は深刻で、全力を尽くしてはいるものの、住民の方々の要望には満足に答え切れていない現状。

また陸前高田市だけでなく、被災地では建設業界において人出不足は顕著。求人は盛んであるものの、やはり特殊な業務であることから多くの人は働き口が見つからず、人口の流出も進んでしまう、アンバランスな都市の現状。

しかしその中でも、ゼロから街を作り直し、災害に強い、そして誰でも安心して便利に暮らすことができる「ノーマライゼーションの言葉が要らない街」を作る。という久保田副市長の言葉には力が込もっていました。

勿論そのためには多くの課題、疑問があります。

このために必要な莫大な資金は何処から出るのか？今後も少子化、人口減少が進む中で、完成した後の都市機能は本当に維持できるのか？山を削り嵩上げた人口の土台で今後、本当に自然災害に立ち向かうことが出来るのか？

これらの課題をクリアして、どれだけの年月が必要かわからないものの本当に「復興」したと言える日が来ることを祈ります。

質問も多く飛び交い白熱した講演会も終わり、ここからさらに10キロ程離れた今日の宿泊地、二又復興交流センターまでラストスパート！

スタート時には偶然、陸前高田市長もお見送りしてくださりました！

【陸前高田市役所～二又復興交流センター】

時間が迫っているため、少しずつクルマでピックアップされることになったた

め、道が走り易くなった辺りで高速モードにギアチェンジ。
しかし登り坂...地図で解ってたんだけどね～
タイムアップとなり、最後まで残っていた2人のランナーと共にクルマに回収
です。

さて到着した「二又復興交流センター」は、旧矢作小学校を改装し、宿泊&交
流スペースとして活用しています。ボランティアや学生の合宿所としても使わ
れています。

ということで、建物の造りはほぼ小学校のまま。しかし必要な所は綺麗に改装
されているので、とても快適に過ごすことが出来ます...とのんびりする間もな
く、今日の宴会場所、「矢作食堂」へGO！

新鮮でないといけないホヤの刺身、なんと一人一皿と、かなりの量が出てきま
した！

トロツとした中にコリつとした感覚もある独特の食感で、もしかしたら好き嫌
いは別れる味かもしれないですね。自分はとても気に入り、ペロリと平らげま
した。

それにしても皆さん疲れている筈なのに（だからかな？）お酒が進む進む。
自分は宿泊地↔矢作食堂のドライバー担当を承り、今日はソフトドリンク
（笑）

宴席で陸前高田市役所に臨時で派遣されている方とお話しさせて頂きました
が、この先の未来を見据えて、被災地だから...という視点でガンガン税金を投
入する体制に疑問を感じる。復興支援に頼るだけでなく、地元の人が、地域を
盛り上げようという動きが無ければ、本来の復興には届かない。

という考えを聞かせて頂きました。

前に進むこと。それは勇気が必要なことですが、壁に当たっている時こそ一番
重要なこと。

昼間見た光景を思い出し、とても複雑な思いを感じました。

時間は瞬く間に過ぎ、いつの間にかお店の閉店時間。
再び小学校今日のお宿へ戻り、明日に向けてのミーティング。
なんと明日はいままでで一番長い距離だそう...

「なに！？」

さて、完走できるのか！？

あっという間の
ゴール！そして...

いよいよ最終日。実はゴールの気仙沼までは現在地から山を越えてしまえば20
キロ程。しかしそこを迂回して海岸線を中心にするため、40キロぐらいは走る

ことになります。

【二又復興交流センター～キッチンひがしやま】

まず目指すは奇跡の一本松。横を流れる川はとても綺麗で、爽快に下り坂を駆け抜けます。巨大なベルトコンベア、クレーンが今度は間近に迫ります。

この奇跡の一本松は、元々高田松原の中的一本であり、津波を受けて他の松が流される中、唯一耐え残った一本です。海側に建つユースホテルが波の勢いを弱め、その他の要因もあったのか、本当にこの松が残ったのは奇跡。残念ながら潮を被り、枯死してしまいましたが、現在はモニュメントとして残り、これからの陸前高田市の再生を見守ります。

ここからは海岸線沿い。といえど、ひたすらアップダウンを繰り返しながらで平坦なところは中々ありません。集落を通る時には、地域の方から暖かい声をかけていただき勇気づけられます。

唐桑半島の付け根辺りで昼食タイム。「キッチンひがしやま」では、本来この日は定休日であるところ、このウルトラシャルソンのために貸切でお店を開けて頂きました。本当にありがたいです^o^ボリュームたっぷりの焼肉定食を頂き、ちょいとのんびりzzz（腹がふくれれば瞼も重くなりますな）

ここまで来れば、ゴールまであと10キロ。普段なら10キロ走るとなるとそれなりに気合いが必要ですが、この時は

「おっ？あと少し！」

と感じるから不思議^o^もちろんこれはウルトラシャルソンのマジックに引っかかってるだけです

励ましあいながら順調に走り続け、地図を見るともう一つ峠を越えればゴールまであと僅か。

「よし！この峠は最後まで走り切ったる^o^」

と決意を秘め、峠に挑みかかるその瞬間...

前のランナーが少し話していた地元のおばちゃんから

「この峠長いよ、頑張って！」

との声が...

その言葉の意味を本当に理解したのは数分後。徐々にキツくなりながら永遠と続く登り坂。足取りはもはや歩きと同等（むしろそれ以下）

この3日間のシメに相応しい峠道、その名も「大峠」名前に恥じない登り坂でした。

一気に下り切った所で、一旦全員集合。

待ってる間、ネコに釣られてついて行くと、飼い主の方とお話しすることができました。

震災当時の悲惨な状況、この家も殆どが水に浸かったこと。たまたま通りかかった、トラックのおじさんも一緒になり、話してくれました。
自分達のイベントについて説明すると、
「折角だから沢山見て行って！気を付けて行ってらっしゃい！」
と笑顔で送り出して頂きました。
ここからラストスパート、途中でゲストハウスカオサングループの小澤社長も偶然に合流！
皆で港町、気仙沼市内をラストスパート。
そして...

ゴール
ついに釜石～気仙沼の約110キロを走破しました！

そのまま皆で銭湯へ。
津波にも負けずに残った昔からの銭湯、今でも街の人に使われています。
漁から帰ってきたらしき真っ黒な若者が、大勢利用していました。

風呂上がりにはなんと、この日獲れたというマンボウの刺身と麦茶を振る舞って頂きました！
初めて食べるマンボウ、とろけるような食感で、とても美味しかったですよ^o^

ここ気仙沼では、シェアオフィスの「co-ba kesennuma」を作られた、杉浦恵一さんから講演を頂きます。

杉浦さんは、日本3周の大旅行中に東北大震災に遭い、中断。しかしお世話になった東北に恩返しをしたい一心で、支援物資を届けたり、震災を風化させないために、「ともしびプロジェクト」を立ち上げる。また人が集う場所を作る必要性を感じ、このシェアオフィス、「co-ba kesennuma」をオープンしました。

次々と自分の「こうしたい！」という思いを確実に形として実行する姿。大きな衝撃を受けました。この中では奇跡的かつ、驚異的な出会い、助けなどもあって実現したことは確かですが、この「行動」こそが、強運を呼び寄せたことは間違いのないと思います。

最後の夜は気仙沼復興商店街内のダイニングHARUで。杉浦さんと奥さん、お子さんにも来て頂きました。
生中一杯でフラフラになりつつ、沢山話して、食べて、飲んで...
途中で杉浦さんのヒッチハイクの話しになり、誰かが
「この中でヒッチハイクしたことがある人～」
と叫ぶと...
なんとその場の8割ぐらいの人が手を上げる□□
変わり者ばかりやんか□

まあ自分も手を上げてるんですけどね（笑）

さらに店を切り替え、居酒屋「ピンポン」へ。地元の方々も大勢集まる居酒屋で、隣の席の方々も交えて乾杯！
閉店ギリギリまでさらに飲みまくりでした！

今日の宿泊地の紫会館は、地元の公民館。
布団を敷いたところで色々と悪ふざけしたり、残っているお酒を飲んで話していましたが、少しづつダウン...
自分も話を虚ろに聞きながらいつの間にか落ちていました。

第一回ウルトラシャルソン（クールダウン）

起きると外は、「雨...」
この日は昼の出発前に、クールダウンで気仙沼大島へ渡る予定。
「この夏最後の思い出に島で泳ぐぜ！」
なんて作戦を練っていましたが、これじゃあかんやん！

少し離れたコンビニまで朝食の買い出し、出発ギリギリでフェリー乗り場に到着。
島に到着しても、雨は強く降るばかり。しかも寒い！！
近くの売店に逃げ込み、ビニール袋を購入...そして

↑こんな姿になりました（笑）
人間、究極の状態に追い込まれると、見てくれは気にならなくなるのですな。

凍える心配がなくなった所で、亀山に登頂開始！（三重県の亀山ではありません）
しばらくは舗装路ですが、途中から登山道に入り、かなりハード。
クールダウンの筈なのに、なんかキツイんですが...
靴の中もぐしょぐしょになり始めたころ、ようやく登頂に成功。
心で目で素晴らしい三陸海岸の絶景を眺め、フェリーの時間もあるため港に向かいます。

帰りのフェリーに乗る頃には天気が回復（遅いわ！）

フェリーではカモメにかっぱえびせんをやることに皆で夢中になりました。
向こうもわかってるのか、ちゃんと船に集まってくるみたいですね！

港で一部メンバーは解散。残るは自分を含め、東京までクルマで向かうメンバーばかりです。お土産を買い、昼食を食べて出発。
途中仙台でも一人、ドライバーを務めたメンバーが別れ、ここからは自分が運転担当。

途中集中豪雨に見舞われ、訳がわからん首都高速の複雑さに恐々としながらも、無事に東京まで辿り着きました。

ここで皆と別れ、一人新幹線で帰宅。
長かったようであつという間だった、ウルトラシャルソンが終わりました。

第一回ウルトラシャルソン (エピローグ)

長文にお付き合い頂きましてありがとうございました。
最後に総括を...

3日間でおおよそ110キロ、間違いなく人生で最長の距離を走りました。
ホンマに

「あ～、しんどかった」

これを達成出来たのは、一緒に走る仲間、サポートしてくれる仲間、沢山の
支えがあったからに違いありません。一人だったら恐らく途中で三陸鉄道や、
BRTに乗り換えていたでしょう (笑)

このウルトラシャルソンを通して、まだ一部分ではあるものの、東北大震災の
被災地の現状を見ることが出来ました。こういう時だからこそ、人と人の絆が
とても重要であることも、身をもって実感できました。

この完走記を見てくれた方に伝えたいこと。
それは、「まだ震災は終わっていない」ということ。時々で良いから、被災地
のことを思い出してほしい。

これからもウルトラシャルソンは街と街を繋いで走り続けます。
第二回は11月1日～3日まで。

今回のゴール、気仙沼から石巻を走ります！

自分も今回だけにとどまらず、なるべく継続して参加し、続けて行きたいで
す。

6.4. 田上百合子さん (東京)

愛すべきばか者達。

「被災地の現在を自分の目で見よう」というウルトラシャルソン。

企画当初、釜石～石巻間220キロを5日間掛けて走る予定でしたが、道路事情も
ありません、8月25日～27日釜石～気仙沼間120キロを走るウルトラシャルソ
ン夏を開催。

企画段階から参加させて頂いて「8月の日差しの中、本当に走れる？」ラン
ナーの安全を最優先に、と思いながら26日午後から伴走車のスタッフとして参
加しました。

いくつもの山越え、「もう、走れない。。」と言いながらもダジャレを交わしながら走るランナー達。

毎日、ゴール地で復興の為に働いていらっしゃる方のお話を伺いました。そして、毎夜の宴会、えんかい、エンカイ。

これぞシャルソンの極意、ザ・シャルソンたる所以。

最終日には陸前高田出身の菅野さんも参加して下さい、フルマラソンを走る偉業を達成！

走って、見て、話して、笑って、吞んで、食べて、交流した！
なんて素敵な愛すべきばか者達。



次回、ウルトラシャルソン秋は11月1日～3日気仙沼～石巻間を走ります。

7. 地元からの声

7.1. 久保田崇さん（陸前高田市副市長）

おはようございます！

曇り空の陸前高田市です。昨日から、とても涼しくなってきました。もはや秋。岩手の湘南の夏は短かったですね・・

さて昨日も様々な会議や来訪者が多く、何を書けばよいやらわかりません。昨日最後の来訪者は、東京はじめ様々な場所から参加し、大船渡～陸前高田間を走ってこられた「ウルトラシャルソン」ご一行様15名ほど。

企画者は大学の先輩で、東京・経堂でパクチャーハウス東京を経営する Kyo Satani さん。被災地を走って感じる。11月のツールド三陸にも通じるコンセプトですが、人のスピードだからこそ、感じる部分が多いそうです。

私は市役所到着時の歓迎講話と懇親会を担当。宿泊先の二又復興交流センター近くの「やはぎ食堂」では参加者の皆さまと盛り上がりました。岐阜から参加した27歳の社員さんはよくよく話を伺うと「車掌さん」だったわけですが、ファミコンの話をほかの30-40代の方々としていたら、車掌さんが「ファミコンって白黒なんですか？」と質問が。

ファミコンはカラーです！

思わず大声で答えた自分でした。世代の違いを感じますね。時々自分は嵩上げ盛り土と起工承諾の関係を「ロードランナー」というファミコンソフトに例えて話すことがあるのですが、これは考え直したほうがよさそうですね。

毎晩宴会をして、翌朝はまた走るという、どう考えても体によくない気がする「ウルトラシャルソン」。今日は二又から一本松茶屋を経由して気仙沼へ行かれるそうです。無理せず休憩しながら走ってくださいね！ 今日もおすごとがんばっぺし！！

（8月27日朝のfacebookへの投稿）

7.2. 石井重成さん（釜石市）

釜石には市民参加型のトライアスロンやマラソン大会があり、「走る」ことに馴染みのある土地です。ソーシャルマラソンが東北を一周し、また釜石に帰っ

てくる日を楽しみにしています！

8. メディア掲載

8.1. 『東海新報』



被災地の今を発信

ウルトラ
シャルソン 気仙2市でも交流活動

気仙2市を含む東北沿岸地域を走って被災地復興を応援するイベント「第1回ウルトラシャルソン」(同実行委員会主催)は24日、釜石市からスタートした。25日は参加者10人が大船渡市大船渡町のショットバー「Hustle」を訪れ、地元で地域おこしなどの活動を積極的に行っている新沼崇久さんと交流。インターネットなども使い、被災地の今を広く発信している。シャルソンは、同実行委の佐谷恭委員長が考案した新しいランニングスタイル。東北沿岸の震災被災地を自由に走り、各地を線でつないで「発見」したものをSNS(ソーシャル・ネットワーク・システム)を通じて発信し、先々で出会った人たちとも交流しながら被災地の状況や心情を伝える。

今回のイベントは、地域おこしなどの効能を持つシャルソンを復興支援に役立てようとして企画された。この日は、東北のほか関東や関西からの参加者が午前7時ごろに釜石市を出発。海岸や飲食店など回りながら30分以上走り、午後3時ごろに大船渡市大船渡町の菊水館に到着した。

その後「Hustle」に移動。震災後におおふなと海来プロジェクトを立ち上げた新沼さんが講演し、津波の爪痕が残る市内の様子を伝えながら「大船渡の特性を生かしたまちおこしをしていかなければならない」と意気込みを語った。

26日は大船渡から陸前高田の間でシャルソンを実施。気仙住民も加わり、参加者全員で被災地の現状と新しい人との出会いを胸に焼き付けていた。

2014年8月27日(水)
東海新報

8.2. 『東北まぐ』

行ってきました東北ー東北沿岸を120km走る ウルトラシャルソン開催ー

「いま、東北沿岸を走る理由」

ランニングを通じて地域の魅力を再発見する「シャルソン」を全国に展開する佐谷恭さんは、東北沿岸の津波被災地周辺120kmをコースにしたランニングイベント、「第1回 Ultra Cialthon (ウルトラシャルソン)」を、8月24日から5日間に渡って開催した。

この大会は、通常のマラソンとは異なり、スタート地点とゴール地点だけが決まっている「シャルソン」スタイルを採用。コースや移動手段はランナーが自由に選択出来るため、長距離のランニングに自信の無いランナーも参加出来るという。地元の方が個性豊かな土地の産品や体験をランナーに提供する、給水ポイントならぬ「給○ポイント」が設けられ、ランナーと地域の交流に重点が置かれている事が特徴だ。さらに、ゴール後も地元で活躍するゲストを招いた講演や懇親の場が設けられ、ランナーが地域の人や文化と濃密にふれあう仕掛けが多数凝らされている。佐谷さんは「こうした体験を、ランナーがSNSを通じて発信することで、今まで届かなかった人たちにもそのまちの情報がシェアされるんです。これが結果的に、新たな人の流れを産むきっかけにもなります」とシャルソンの意義を話す。

第1回となる「ウルトラシャルソン」では、岩手県の釜石市をスタート地点に、宮城県気仙沼市をゴールとする沿岸部中心のコースが設定された。「単なる被災地の視察に終わらせないのがシャルソンのねらい」と話す佐谷さんは「参加ランナーが体験した人や土地との繋がりは、心情に深く刻まれ次の行動の原動力となる」と確信している。

早くも「今年の11月に、宮城県北部の気仙沼から石巻を目指す第2回大会を開催する予定」と話す佐谷さん。

参加ランナーそれぞれが、東北の語り部として訪れた土地の魅力を発信し、新たな仲間を誘って再び訪問してくれることを意識している。「ランナーたちがシャルソンをきっかけに、東北との繋がりを深めていくことで、継続的な関わりが生まれその土地にとっても大きな力となればうれしいですね」と佐谷さん。

今回の成功を自信に、長期的な視座に立った新しい形の復興支援として、今後もウルトラシャルソンを継続開催していく。

東北沿岸の当時といまを知り、これからを語る

「信じられないくらい走って、信じられないくらい笑って、信じられないくらい土地のものを飲み食いしました」と話すのは、はるばる京都から参加した山戸恵理加さん。普段は、海外からの宿泊客を多数受け入れる大手宿泊施設に勤務している。海外から来るゲストの多くも東北に関心を寄せている事もあり、東北沿岸の人たちとの交流には強い関心があった。

山戸さんが、最も印象に残ったという光景の一つが、陸前高田のまちに建設された、総延長3kmの盛り土を運ぶ巨大なベルトコンベアだ。要塞のようにそびえる設備の大きさに、ただただ圧倒されたと言う。大会4日目の講話にやって来た、陸前高田市の復興事業の陣頭指揮をとる久保田副市長から直接の説明を受けた。

津波で市街地の大半が消失する程の被害を受けた陸前高田市。山戸さんたちが先ほど走った草原が、かつては市街地だった事を知り衝撃を受けた。久保田副市長からは「この場所にもう一度宅地を造成するため、12mのかさ上げを行っている」と説明を受ける。「従来の工法でやれば10年にかかる大工事だが、そんなに長い期間を掛ければ住人たちは仮設住宅での生活が長引き、この土地を離れてしまう人も増える。そこで、工事を3年で終わらせるために先のベルトコンベアーを導入し、5年で新造した宅地への移住を完了させる計画だ」と聞く。「5年という期間は住民にとってはあまりに長く、行政にとっては闘いの期間です」という久保田副市長の言葉に、これまでは知る由もなかった被災地の過酷な暮らしと人々の闘いをかいま見た。

打ち捨てられた線路と真新しいBRT（代替えバス交通）の駅、校庭に並ぶ仮設住宅のくすんだ屋根、民家の跡地に手向けられた真新しい花。日本の他の地では決して見る事の出来ない風景に、別の世界に来てしてしまったと感じながら走ったという山戸さん。「長距離には自信が無かった私が、連日20km以上を走り切ったことが一番の驚きです」と笑顔を見せる。

大会を通じ、東北沿岸に暮らす人や行政の方、東北を応援する県外の人たちなどそれぞれ立場の異なる人たちと、東北のいまと未来について連日連夜言葉をかわした事が何よりも大きな財産になったと言う。

「私にとってのウルトラシャルソンは、おいしいものをたくさん食べ、バカな話もしながら良く笑い、“また会いましょう”と手を取り合って、最後は新しい出会いに向け次の地へ走っていける素敵なイベントです」と山戸さん。「ここで見た現状こそ、私たちが伝えるべき“東北のいま”なのだと思います」（インタビュー・編集 / 岸田浩和）



8.3. 『広報かまいし』

T ま o ち p の i 話 c 題 s

ウルトラシャルソン

8月24・25日〔市内各所〕

シャルソンとは、ソーシャルマラソンの略称で、距離もコースも決まっていないスタートから目的地までを、地元の名所を巡ったり、地元の方々と交流したりしながら走り、最後の目的地でパーティーを行い、参加者たちが当日の出来事などを報告し合うイベントです。「記録」よりも「思い出」を競うマラソンで、近年、日本の各地で開催されています。

今回のウルトラシャルソンでは、スタートの釜石から気仙沼までの区間100キロ超を走ったり歩いたりしながら4日間でゴールするもので、参加者が訪れた先々の現況や心情などがインターネットで伝えられました。

初日の8月24日、一行は大町をスタートし、県道水海大渡線を通って鶴住居までの区間約16kmを走りました。ゴール後は、震災体験や復興状況を学んだほか、地元の人たちと郷土料理を楽しみながら親睦を深めました。そして、翌25日早朝、参加者たちは市役所前から平田駅まで走った後、三陸鉄道で大船渡に向かいました。

ウルトラシャルソン日程

8月24日	釜 石
8月25日	大 船 渡
8月26日	陸 前 高 田
8月27日	気 仙 沼



県道水海大渡線を走る参加者たち



三陸鉄道で次の目的地:大船渡へ



ウルトラシャルソンの参加者

8.4. 東京FM / JFN系列『クロノス』

8月14日 ウルトラシャルソン

今朝は、この夏休みに東北で開催される、ちょっと変わったランニングイベントを紹介します。「ウルトラシャルソン」です。

「シャルソン」は一般的なマラソン大会とは違い、もっと気軽に、「町を走ることを」楽もうと企画されたもので、いま、全国的に広がりを見せています。そのシャルソンを被災地支援につなげようというのが、8月24日にスタートするウルトラシャルソン。企画した、シャルソンの発案者・佐谷恭さんに伺いま

した。

◆心の赴くままに走って被災地支援

シャルソンとは「ソーシャルマラソン」の略。町を自由に走ってその町の魅力を発見、それを走った人同士でシェアしようという趣旨の新しいタイプのマラソン大会。通常はマラソンというとスタートからゴールまでのスピードを競い、前を向いてどんどん進み頑張るがシャルソンは、スタートは決まっておらずゴールだけが決まっている。コースも決まっていない。

ある街を、自分の心の赴くままに進んで、面白いものや魅力的なものを発見して自慢する。ゴール後にシェアするパーティーをする。そこでいろんな体験をした人が口々に自慢を語り、その町の魅力がどんどん引き出されていくのがシャルソンの特徴。最初は僕が経営するパクチーアース東京という東京世田谷のお店で『共同マラソン』という名称でスタート。一年に一度やろうと2年半前にはじめたが、予想以上にウケて色んな地域でやりたいという声があがり、町おこしをやっている人、地域を何とかしたいという心意気のある人に、シャルソンという仕組みでやりませんかと呼びかけをした。北は北海道から南は宮崎まで2年半で41回開催。

東北には僕自身は縁がなかったが、震災後の年の5月に仙台、南三陸にお手伝いに行く機会があり、それからは定期的に半年くらい、理由をつけて東北へ向かっていた。自分なりになにができるのかを考えて、シャルソンと言う仕組みも作ったので、これで地域活性ができないかと。東北に興味がある人、外の人たちが街と街を繋いでいく。シャルソンで活性化して観光客を受け入れたり色んなくるようになったらいいなと思って、東北にシャルソンを持っていく。

1回目に予定していたのが釜石から石巻だったが、とりあえず8月24日から8月28日に釜石から気仙沼にて開催。その後は気仙沼から石巻へ。石巻の跡も話が進んでいる。東北の海岸沿いをどんどん南下していく形で、1年に1度から2度続けたいと思っている。5日間のイベントなので全部参加する人は宿泊を伴うため、すでに申し込みは締め切っているが、あとは地元の方が一部参加する方法もあるので、そういう方はぜひともウルトラシャルソン実行委員、およびご当地シャルソン協会までご連絡を。「走って、見て、感じて、話して、伝える」という行為をすることで、旅をすること、地元の人が外の人と触れ合うことで、もっと自分たちのことを発見して好きになるということをウルトラシャルソンでやっていきたい。今回来られる人はぜひ。第2回第3回とやっていくのでぜひ注目して欲しい。

ウルトラシャルソンスタートは8月24日。28日まで4日間かけて、岩手県釜石市から、宮城県気仙沼市を走ります。すでにフル参加の申し込みは終わっていますが、開催地の地元の方で「1日だけ参加したい」といった、スポット参加はまだ受付を行っています。

9. 実施概要

名称

第1回ウルトラシャルソン (Ultra Cialthon 2014 Summer)

開催期間

2014年8月24日 (月) 〜28日 (金)

延べ参加人数

98人

主催

ウルトラシャルソン実行委員会

スピーカー

両川吉信さん (鶴住居)

佐々木勝さん (総務企画部総合政策課長)

新沼崇久さん (大船渡海来プロジェクト代表)

久保田崇さん (陸前高田市副市長)

杉浦恵一さん (気仙沼ともしびプロジェクト代表)

スポンサー

カオサングストハウスグループ (有限会社株式会社万両)

パクチャーハウス東京 (株式会社旅と平和)

Happy Printers (堀江織物株式会社)

Cheero (ティ・アール・エイ株式会社)

篠原寛行さん、森下信之さん、増田健二さん、渡辺優さん、大脇盛弘さん

後援

一般財団法人 青少年国際交流推進センター (IYEO)

協力

釜石市のみなさん

大船渡市のみなさん

陸前高田市のみなさん

気仙沼市のみなさん

パートナー

runtastic GmbH (オーストリア) : ルート記録

Prezi Inc. (アメリカ) : [報告会用資料](#)

10. おわりに

★今後のウルトラシャルソンについて

第2回ウルトラシャルソンを2014年10月31日～11月4日の日程で、気仙沼～南三陸～登米～石巻で実行します。その後は東北沿岸を南下していく形で年1～2回ずつ実行して行く予定です。東北沿岸を南下し終えたら再び北から走り、3～5年おきに地元の方々と交流しつつ津波被災地沿岸の姿を記録していきたいと思っています。

